

○代前には一兆九九五億一六二万七七七六人という膨大な数の人がいたことになりません。たった一人の人が生まれる背景には沢山の人がいたことを忘れてはいけません。

お坊さんはこのように説いておいででした。この議論のあとのほうの計算のもと論理には、誤りがあります。何故ならこのような計算をすると地球上には昔ほど大勢の人がいたことになってしまふからです。しかし、この計算ほどでなくても、一人の人が生まれてきた背景には大勢の先祖の人たちがいたことは疑いありません。そして、人が生まれてくるといふことはこのように大変なことなのです。

さてこのお坊さんの話は生命の継続性という生物の持っている重要な特徴をもとにしています。この問題を歴史的にみてみましょう。一六六五年にロベルト・フックという人が当時初めてできた顕微鏡でコルクの薄片を観察して細胞を発見しました。しかし、彼はこの細胞というのは全ての生物の体を作っている構造の単位であるという重要な事実に気がついていませんでした。一八三一年にブラウンという人が細胞の中に核があることを見つけました。しかし、彼もまたその発見の重要な意味を知りませんでした。その後、この核の有無を頼りに調べて、全ての生物体は細胞からできていることを明らかにしたのが有名なシュヴァンらの細胞学説（一八三九年）です。このころに、卵も細胞であることを、細胞は細胞からしかできないことなどが分かってきて、すべて生物は細胞を通して代々つながってきているのだというフィルヒョウの細胞系統説（一八五五年）が成立します。このようにして生物学者たちは生物が生まれるというのは、親の細胞から次の世代の個体が生

当時から、そのまま変わらずに続いてきたものも、あるいは両親の時代に新たに变化した
ものもあるかもしれません。しかも、生まれてきたこの体は、人類が長い歴史の間いくら
調べてもまだ調べ尽くせないように複雑な体なのです。

生物が生まれるということの中にはこのような意味があります。皆さん、この価値ある
貴重な命を受け継いだ次の世代を大切に、かつ遅しく育てあげてください。

(早稲田大学・生物学)

